

平成29年10月25日(水)

老球の細道366号

## 審判は正確さとエンターテインメント性も

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

先月行われた西武対ソフトバンク戦で球審を務めた審判員が、左打者の見逃し三振の際、その場で体をひねり、右肩を下から突き出した。関係者やファンの間では「卍」と呼ばれる有名なポーズらしい。このポーズは、この審判員が若かったとき、先輩方の格好を見よう見まねでやっていて、それでも、何か自分のオリジナルな形はと考え出されたという。

プロ野球では今、3ストライク目になると、横を向いて正面に拳を突き出す「パンチ型」と、両腕を前に出した状態から片方を手前に引く「弓引き型」が多い。「卍」も「パンチ型」を応用して編み出された。「ストライク」の基本形は拳を作り、右腕を上げる。日本野球機構では、最初の3年間は基本に徹底する。その後は自分だけの形を考えていいとされる。大事なのは、体のキレ、スピード感だそうだ。

わがバスケットボールの審判にもたくさんのポーズがある。基本の形はマニュアル化されているが、野球と同じように審判員によって独特の個性的なポーズも見られる。私は現役の頃に審判もやっていたが、大げさなポーズをとることが照れ臭くて上手な審判ができなかった。試合後の審判指導では、「もっとアクションを大きくしなさい。淡々とやりすぎる」といつも注意を受けていた。

元々選手だった高校時代から審判のジャッジにはクレームをつけてテクニカルファールをよくとられていたので、自分が審判をやることに対してモチベーションは低かった。コーチになってからも、審判をやる「コーチの眼(良い所を探す)」でゲームを見てしまい、「審判の眼(悪い所を探す)」で見ることができなかった。

近年日本バスケットボール界に多くのプロチーム、プロ選手が生まれたが、遂にプロレフリーも誕生した。愛知県出身の加藤誉樹さん(JBA公認S級、FIBAライセンス)である。先日の男子U-19世界選手権大会ではカナダとイタリアの決勝戦を裁いたり、ユーロ選手権でも重要なゲームを裁いていた。審判にも「スター審判」ができつつある。

Bリーグがプロとして『世界に通じる選手、クラブの輩出』を理念とするなか、そのような選手やクラブを育てるためには、審判も同様に世界レベルの審判を育成しなければならない。選手、クラブがプロである以上、審判もプロとして選手たちとともに切磋琢磨することが望ましいと日本バスケットボール協会の専務理事はコメントしている。

審判員はゲームの裏方的な立場であるが、いざ試合になるとコーチ、選手、観客からのクレームが半端でない。これらのクレームにぶれないで正しい判定を下すには、確固たる人間力、審判哲学、そしてルールへの熟知などが求められる。また選手と同等かそれ以上に走る体力も要求される。

昨年はWリーグで審判員がミスジャッジによって裁判に訴えられそうな問題が生じた。また、多くのスポーツで採用されているが、ビデオ判定もBリーグで導入されるようになった。今後ますます審判の世界、立場は厳しくなっていくのではないだろうか。

ゲームは選手、コーチ、観客、そして審判によって成立する。感動するゲームを演出するためには、これからの審判は、正しく判定し、選手、コーチを納得させる力強さ、観客を意識したエンターテインメントが求められていこう。